

## 祭囃子は永遠に！

9月18日の白翔祭に向けての練習が本日からスタートしました。

さて、ビートたけしが、東京オリンピック・パラリンピック開催前、自身の著書『コロナとバカ』の中でこんなことを言っています。

「こんな状態で本当にオリンピックなんてやるのかなあ？最終的にどんな決定になるかは置いて、そろそろニッポンは『お祭り依存体質』から抜け出したほうがいい。サッカーやラグビーのワールドカップ、オリンピック、万博、カジノ誘致と、楽しげな“お祭り”をコンスタントにもってきて、ドンドン経済のカンフル剤にしないと経済がもたなくなっている。これじゃあ、いつか弾が尽きちゃうだろ」と。

彼の本質を突く言動にはいつも考えさせられます。この意見にも激しく同意します。学校でも、働き方改革が声高に叫ばれる中、教育活動の集中・精選は喫緊の課題です。学校行事に必要な以上の時間と労力をかけることはナンセンスであり、体脂肪率が低く研ぎ澄まされた体質のごとき教育活動が求められます。が、そうは言っても、やはり、体育祭と合唱は外せないというのが率直な考えです。

体育祭と合唱は、子どもたちに大いなる成長もたらすため、我々教師の人間力が心底問われ、指導の成果がその後の指導にも大きく反映する一里塚だと考えます。ビートたけしの言葉を借りれば、貴重な“弾”なのです。

ということで、昨年度は、競技・時間短縮等によるコロナ対応体育祭でしたが、今年度も引き続きコロナ対策に万全な配慮をしながらも、競技数は従前の形での実施計画をお願いしました。

体育祭をする意義がどこにあるのか。私としては、具体的に、次の4つの側面があると考えます。

- A. 机上では得られない体験を通じた、向上心・克己心・成就感・達成感・協調性・責任感・集団規律・連帯感・思いやり・他への感謝の気持ち等々の涵養や可能性の追求等、自己や集団の成長の機会
- B. 日本独特の学校文化・非日常的行為を通じた、喜怒哀楽・自己表現・願望希求・開放感の獲得・家族や友達・先生方とのふれあい等々、学校生活をより楽しく豊かにする
- C. 心身の健全な発達や健康の保持増進・体力の向上に対する関心をもち、運動に親しむ態度を育む
- D. 思い出づくり

先にも述べたように、体育祭への取組は、「人間的成長の糧であり、子どもたちの心を耕す絶好の機会」だということです。そのために重要なのは、「本番」以上に「過程」と「事後」の指導であることは言うまでもありません。

準備・練習段階では、「何のために体育祭をするのか」と常に子どもたちに考えさせ、折りに触れて、その目的や意義を繰り返し子どもたちに問い続けることや、「モラル」を重視した活動になる指導が必要となるでしょう。

終わってからは、「楽しかった、楽しかった、だけで終わっちゃダメだ。自分の好きなことだけを一生懸命頑張ったって、勉強や生活面でしっかりできないようでは、体育祭なんてやった意味がない」と説き、日々の学習・生活面での高い目的意識・規範意識を醸成するために、継続した支援・叱咤・激励が重要です。

これまでの経験値として、体育祭をはじめとする学校行事をしっかり頑張れた学校や学年・学級・個人は、日常の学校生活もしっかり充実したものを創り上げてきたのは紛れもない事実です。

我々は決して、お祭りを楽しむために生きているのではなく、「思い出づくり」だけのために生きているのでもありません。我々の生活の中にお祭りが存在するのは、果てしなく地味になる可能性もあり得て、それ相応の努力や工夫がないと途方もなく退屈になるかもしれず、何気ない膨大な時間だけが過ぎていく、そんな日常生活を少しでも味わい深く豊かにするためだと。

学校生活の根幹はもちろん日常。お祭りは、カンフル剤ではなく、料理の最後に入れる隠し味とでも言うべきでしょうか。

そして、私はこう思うのです・・・・・・・・・・・・・・・・

新潟に33年間暮らし、長岡に3年間勤務の経験があるのに、長岡花火を一度も見ることがないことを周囲から珍しがられます。

私個人としては、多くの人に仰ぎ見られる「打ち上げ花火」よりも、暗闇の中の「線香花火」に心ひかれます。

子ども達にとって、体育祭が「打ち上げ花火」なら、日常の学校生活は「線香花火」の如く、いずれの場合であれ、夜空や暗闇で周囲を明るく照らすような感動的な輝きを放ってほしいものです。